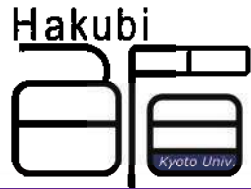


vol. 8

京都大学
白眉センターだより



THE HAKUBI CENTER NEWSLETTER

- 2 巻頭エッセイ (石川尚人)
- 3 シリーズ白眉対談⑦フィールドワーク
- 8 研究の現場から
(Marc-Henri Deroche、額定其勞、原村隆司)
- 11 海外渡航記 (大串素雅子)
- 12 白眉研究ピックアップ (花田政範)
活動紹介 (第4回白眉合宿)
- 13 活動紹介 (2013年度年次報告会)
- 14 ポスト白眉の日常 (東樹宏和、長尾透)
- 15 お知らせ
- 16 第5期白眉研究者



西堀榮三郎さんの言葉

人間・環境学研究科／総合人間学部 教授・白眉センタープログラムマネージャー（兼任） 石川 尚人

「とにかく、やってみなはれ」。白眉プロジェクトに絡めて思い浮かぶのがこの言葉です。これは、日本初の南極地域観測隊の副隊長で越冬隊の隊長であった西堀榮三郎さんが、越冬中に隊員に発した言葉として伝わっています。滋賀県にある「西堀榮三郎記念探検の殿堂」の方にお聞きしたところ「西堀さんの口癖だったようだ」とのことです。

西堀さんは登山家・探検家であり、科学者・技術者でもあった人です。と言っても、実は私が彼について知っていたことは第一次南極越冬隊長であることの他に、今西錦司さんと京都一中／第三高等学校／京都帝国大学で山岳部として活動されていたこと、京大理学部で無機化学分野の助教授になり、その後企業の技術者に転身して、戦時中日本初の純国産真空管の開発を手がけたことぐらいでした。この機会に、久しぶりに彼の『南極越冬記』や『西堀榮三郎自伝「人生は探検なり」』などの彼に関する書物をいくつか読んでみました。上記の経歴の他、多様な領域での多岐にわたる足跡はここでは省きますが、その中で発揮された、彼の行動力と創意工夫のもの凄さと、飽くなき探究心に驚かされました。そんな彼の経験に基づいた、示唆に富んだ言葉が「西堀語録」として残っています。その中からいくつかを紹介します。

西堀さんは自分を駆り立ててきたものは「未知のものに対する探究心」であると述べています。その探究心の芽生えは、中学時代に山に登りながら、草花の名や落ちている石の成分を考え、あの峠、あの山の向こうはどうなっているのだろうと考えていたことにある、と記しています。大学時代、登山と研究の両立に悩んだそうですが、研究に没頭する中で「学問における真理探究が、自然そのものを探求することだと考えると、今、試験管をもち、メーターをのぞいて真理を探究していること自体が「自然」なのだ、山と実験との違いはあるけれど、自然現象の探求であることにはかわりないのだ」と気がついたそうで、「探検の醍醐味は未知の世界が開けていくことにある。科学でも同じことで、これが人間の本性だと思う」と述べています。『南極越冬記』では「南極の生活で、何が一番苦しいかと聞かれたならば、わたしは、それは未知から来る不安だと答える。そういう不安に絶えず襲われているのである。しかし、その未知が、刻々の経験によって、すぐに既知に変わってくる。そしてそのとき、ひじょうな喜びをとまなうのである。その既知

の喜びがあるからこそ、南極の生活は、わたしにとってこの上もなく楽しいものになっているのである。」と記しています。

西堀さんが南極に行きたいという「夢」を抱いたのは、11歳の時、白瀬臺中尉の「南極探検報告会」に行ったときだそうです。「南極が私の心にすみついてしまった。」と書いています。中学から大学と山岳部にいて山登りを続けてきたのも南極への夢に連なったものであったそうで、南極関係の文献に努めて触れるようにし、会社からアメリカに留学した際には、アメリカの南極探検家を訪ね歩いています。そのようにしながら、南極への夢が実現したのは54歳の時でした。「志というか、願いというか、夢というかそういうものを持っていると、いつか実現の道が開けてくる。人間は生きていくうちに、必ずどこかで分かれ道に行き当たるものだが、そのとき夢とか志があると、ついそっちのほうを選び、チャンスをつかむことになる。」というのが彼の言葉です。

冒頭の「とにかく、やってみなはれ」という言葉は、言われた側の背中を押してくれる言葉です。西堀さんは中学時代に、技術者になるためには幅が必要と考え、何でもやってやろうという実践主義になったと言い、まずやってみるという積極的に「経験」を積む姿勢が大切であるという考え方であったので、そこからできた言葉であろうかと思えます。一方、彼はチャンスを与えることの重要性を言う中で、こんなことも言っています。「アイデアの提案に対して「そりゃあよい考えだ」と何れともあれ賛同すべきだ。それは褒めているのではなく、自分自身に「育てる心」を起こさせるため、育てる努力をさせることになる。」「とにかく、やってみなはれ」は、言った側の気概と責任を問う言葉であるのでしょうか。

（いしかわ なおと）



大陸縁にまき上がる雪煙。8月末厳冬期早朝、海氷上より南極大陸をのぞむ。

シリーズ白眉対談⑦

フィールドワーク

司会・編集：ニューズレター編集部

今回は海外でフィールドワークを行っている4名の研究者に来ていただき、海外現地調査の魅力や経験談を話してもらいました。

登場人物と研究課題

坂本 龍太 特定助教 『ブータン王国における地域在住高齢者ヘルスケア・システムの創出』

王 柳蘭 特定准教授 『アジアにおける中国系ディアスポラと多元的共生空間の生成』

加藤 裕美 特定助教 『熱帯型プランテーション開発と地域住民の生存基盤の安定』

前野 ウルド 浩太郎 特定助教 『アフリカにおけるサバクトビバッタの相変異の解明と防除技術の開発』



左から前野氏、加藤氏、王氏、坂本氏

研究紹介

(司会) 初めに皆さんがされている研究について伺いたいと思います。王さん、お願いします。

(王) 私は中国系の移民について研究しています。主にタイをこれまでやってきましたけど、中国に行ったり台湾に行ったり、最近は他の地域にも行っています。

(司会) 中国系の移民の人たちには何か特徴があるんですか？

(王) そうですね、親族関係が中国から東南アジアに広がっていて、移民を追いかけていると親族が国境を越えているので、複数の地域をまたいだ研究になるんです。

(司会) 専門領域としては、地域研究、文化人類学ということなんですね。

(王) そうですね、加藤さんと同じところの出身なんです。

(司会) そうなんですね。では、そのつなかりで加藤さん、ご自身の研究紹介をお願いします。

(加藤) 私も王さんと同じく文化人類学や、東南アジア地域研究が専門です。これまでは「狩猟採集民」と呼ばれている、主に森の中で動物を狩猟したり、

植物を採集して、生活をしてきた人々の研究をしてきました。特にマレーシアのボルネオ島という島があるんですけど、そこに住むシハンというエスニックグループを対象に研究をしてきました。ボルネオ島では森林伐採やアブラヤシのプランテーション化が進んでいるので、そういった開発に対して、人々の生活がどのように変容しているのか、どのように人々が対応しているのか、といったことに着目して研究をしています。

(司会) では次に坂本さん、お願いします。

(坂本) 私は、ブータンという国で、高齢者医療を展開する仕事をしています。ブータンでは、もともと母子保健とか、感染症が主な課題だったんですけど、それがうまくいったということで、さらなるターゲットとして今、高齢者に眼が向けられているんです。ブータンでは伝統的に親族や隣人によって高齢者のケアはされてきたんですけど、若者が地方から都会に出てくる現象がはじまってきているので、日本の経験を学びながら、ブータン人自身がブータンに合ったやり方で、高齢者ケアを行うのに協力したいと思っています。

(王) 何でブータンなんですか？

(坂本) ブータン、僕があこがれてたんですよ、ずっと(笑)。小学校のときから。

(一同) (笑)

(坂本) 僕が小学校6年のときに、当時のブータンの国王が日本に来たんですよ。そのとき、王様の態度がカッコいいなと思って。服も日本の着物にちょっと外見似てるし、あと顔も似てるんですよ。いいなと思って。いつか行きたいなと思ってたら、そういうチャンスが来たんですよ。

(司会) 前野さんはどういったご研究をされているんですか？

(前野) 自分はアフリカで大発生するサバクトビバッタというバッタの生態を研究しています。小さい頃から昆虫学者のファールルにあこがれて、将来昆虫学者になりたいなと思って昆虫学を専攻しました。学生時代に外国から輸入したこのバッタを研究し始めたら、面白くてはまりました。このバッタは、農産物を食い荒らし、大勢の人々が飢えに苦しむという、社会的なインパクトも与える重要な害虫です。昔、アフリカが植民地だった時代は、ヨーロッパの人たちが気合入れて研究していたんですけども、アフリカ諸国が独立してからは、現地で研究してる人がほとんどいなくなりました。現地でフィールド調査したら何かきっと新しいことがわかってくるんじゃないかなって思うので、西アフリカのモーリタニアに行くことになりました。

(加藤) 昆虫学ではフィールドワークという手法は、一般的なんですかね。

(前野) はい、基本中の基本ですけど、大半の研究は実験室で行われていると思います。自分は、実験室の人工的な環境下で見えるものを自然だと誤解していたのですが、実際に生息地に行ってみたら、砂漠なので温度は劇的に変化し、乾燥もひどいし、餌も全然ないときもあり、自然とリンクした姿を見ないと、やっぱりバッタの生態を知らないなっていうのに気づきました。自分は現地に行って本当によかったです。

研究分野に進んだきっかけ

(司会) 今の、前野さんや坂本さんの話では、ご自身の研究分野を志望されたきっかけが出てきたんですけど、王さんはどうですか？ どういうところから、地域研究、文化人類学に興味を持たれたんでしょうか？

(王) 学部の時に海外旅行に行ったのがきっかけです。学生同士でモンゴルに行ったんで、モンゴルの研究をしたかったですよ。全くの異文化を知りたかったです。カルチャーショックですし、楽しいし、と思って。大学院入試のときも、一応研究する地域とか決めるんですよ。それで、私はモンゴルで研究をやりたいて、指導教官になる予定の先生としゃべったら、何かモンゴルではだめとか言われて(笑)。

(一同) (笑)

(王) コネもないうえに、どういう具体的な計画があってモンゴルって言うんですかと問いただされ、確かにそ

うかなくなって思い直しました。自分に関係のある中国系の移民を対象とすることも大事な研究だからって言われました。けれど、なかなかあんまり楽しいと思わなかったんですよ。自分の研究テーマって、根暗なんですよ。移民って暗いイメージがあったんで。モンゴルだったら楽しそうに見えるんですけど。

(一同) (笑)

(王) だから私は最初はあまりやりたくなかったです。そこで、中国系移民のことを研究するときに、まず外に行つて、実際に国外で生きている中国人ってどういう人たちなのかを、まず見るっていうことから始めました。調査を続けるなかで、だんだん違和感がちょっと減ってきたかなと思うんですよ。

(司会) あ、ちょっと減ってきた(笑)。

(一同) (笑)

(王) やっぱり、全くの異文化を研究するのに比べて、自分の文化の境界線を対象にするのってそんなに楽しくないですね。自分とは違うまったくの他者について、哲学的にあるいは研究対象として距離をおきながら、楽しく、あるいは賢く書こうと思ったら、書ける人は多いと思います。でも、自分もその文化を半分かぶっているんで、あんまり下手に学術的に高尚なことを言って、自己満足とかいうわけにもいかないんで。

(加藤) ああ、主観と客観の区別ですね。

(王) 主観と客観と。自分もそのメンバーに、広い意味で入っていると思うと、

あんまりやすやすと分かったつもりになることができない面があるんで。

(坂本) でも何か明るいイメージあるじゃないですか。華僑の人たちって、たくましくて。

(王) それは、メディアが時代に応じて、その時代時代で切り取っていくイメージなんですよ。華僑について言えば、例えば韓国とか香港とか台湾とかが伸びてきた時期に台湾とか香港を指して、ドラゴンとかって言って、中国系の人はドラゴンの末裔みたいな、そういう表象をする時期があったんですね。今だったら中国との関係が悪いんで、だからイメージ変わるんですよ。それで30年間ぐらいはそういうのをずっと見てきてるんで、何かその浮き沈みを見ていると、必ずしも楽しいような感じじゃないっていうか。

(加藤) 今でも移民に対するイメージって暗いんでしょうか？

(王) 暗いんですけど、暗い面があるんだけど、たくましい面があるんで、その暗さを経験した中にある、たくましさで焦点を当てたいのです。こうした側面はこの移民でもやっぱりあるんですよ。

(司会) 加藤さんは、どうですか？

(加藤) 私が文化人類学に興味を持ったのは、高校のときで、いろいろな本を読むなかでも、特に文化人類学や日本民俗学の本には共感、というか刺激を得ることが多かったんです。それで、大学では文化人類学を学びたいなと思うようになりました。で、実際に大学に入ってから、フィールドワークなどの研究手法を学ばなかつたんで、実際に現地に行つて向こうの人たちと同じ視点で理解しようとする考え方にすごく共感を得ました。あと、もともと人と自然の不可分な関係に関心があったので、熱帯雨林は興味関心の一つの場所ではありました。ちょうど高校生ぐらいの時に、熱帯雨林伐採の環境問題とかいろいろ叫ばれていて、熱帯雨林が抱える問題に目が触れる機会もあったので、実際そこに住んでいる人たちについて、もっと理解したいなと思うようになりました。

(坂本) 僕は、ブータンに行った理由は言ったんですけど、この分野に進んだのは、もともと救急で医者やっていたんですよ。勤めていた病院が最後の砦だったんです。社会的に問題視されて他の



対談の様子(坂本氏と王氏)

病院から断られるような患者さんが結構来てたんですね。そういう人たちが、診療後病院から出てどうなるのかっていうのにごく興味があったんです。でも救急ってもう次から次へ患者さんが来るから、なかなか一人一人の患者さんの社会的な背景とか立ち入れないんですね。でも、例えば心筋梗塞で来る人がいると、ヘビースモーカーだったり、高血圧を放置していたりというのがあって、ああ病院に来る前に何とかしていればここに来る必要なかったのになんていうのも思っていました。だから、社会的な方に興味が出てきて、で、ぜひそういう病院と社会をつなぐような分野に行きたいなと思って、それでこの公衆衛生学とかフィールド医学っていう分野に進みました。

フィールドワークの経験

(司会) 皆さんいろんな国に行かれて珍しい経験とかってあるんですか。

(前野) 自分の赴任先がモーリタニア国立サバクトビバッタ研究所という、バッタ専門の防除機関でした。アフリカでサバクトビバッタが大発生する国には必ずそういう専門の機関があります。ローマのFAOの本部で開催されたサバクトビバッタ会議に参加し、40カ国の代表とみんなでバッタ問題について熱い議論を交わし、「おまえの国からバッタが飛んで来たぞ」とか、「我が国は見事にバッタ防除に成功した」とか国際的にバッタについて議論することがありました。

(司会) それはモーリタニア代表みたいな感じですか。

(前野) はい。自分は日本ではなくモーリタニアの一団として、FAOに派遣されました。あと、自分のやっているメインの研究は、4、5日サハラ砂漠で野宿して、朝から晩までバッタが何をしてくるかを目撃する観察することでした。(坂本) 死の危険とかないんですか、砂漠の中で。

(前野) 遭難すると死ぬので、車に2メートル近いアンテナがついて無線で数百キロ離れた研究所と通信できましたし、車にGPSつけたり。万が一、遭難したときに備えて、何重にも保険をかけていたんですけど、1回サソリに刺されて泣きそうになりました。

(坂本) (笑) それは大丈夫なんですか。

(前野) 夜中にサソリに刺されちゃって。



対談の様子（前野氏と加藤氏）

で、みんなをを起こすの悪いからと思って、水で冷やして我慢してたんですけども、全然治らなくて。朝、所長にサソリに刺されたって言ったら、何でもっと早く言わないんだって怒られました。

(一同) (笑)

(前野) 手遅れかもしれないけど、見せてみろって言われて、患部を見せたら、所長がつねって呪文を唱え始めて、よし、浩太郎、これでもう大丈夫だって。

(一同) (笑)

(前野) で、一命を取り留めました。

(一同) (笑)

(司会) 加藤さんは狩猟採集の暮らして珍しい体験とかってされたんでしょうか？

(前野) ご飯って何食べてたんですか？

(加藤) ご飯は、サゴヤシっていう、ヤシの幹に蓄積される澱粉（でんぷん）を食べていました。澱粉を砕いて、くず粉みたいな感じにして、で、食べるときにお湯で溶いたり、いろいろなものに混ぜて食べていました。

(前野) 加藤さんが食べてたんですか？

(加藤) はい (笑)。あとは言語が記録されていない少数民族だったので、まず言語を覚えることにかなり時間がかかりましたね。

(前野) そこに住むって言って、村人は出て行けとかならなかったですか？

(加藤) 幸いそのようなことはなかったです。もともと現地では、ほかの村の人がフラッと来て、数週間一緒に住んで、また帰っていくような慣習があったので、外部者が来ることに對して、そんなに抵抗はないようです。来る者拒まず、去る者追わずって感じでした。また、自分の子供ではない子を養子に

したり、血のつながりのない人と義親族のような関係を結ぶことがよくあるので、私も養子として受け入れてもらうことができました。

(坂本) 水はどうしてるんですか？

(加藤) 水は、水道はないんですけど、近くに小川が流れていて、そこですてですね (笑)。トイレも、飲み水も、水浴びも、皿洗いもその川で、という感じでした。

(王) 女性として危なかったこととかないんですか？

(加藤) 村にいたときは、安全でした。やはり村の慣習法というか、村の人々の目で守られているので、危ないことはなかったです。むしろ多分、全然知らないところに1人で行ったり、街に行ったらスリに遭ったりとかそういうことのほうが、危ないかなと思います。あとは、そうですね。言語的に言っただけでいけなくて言葉が結構あって、それを知らずに私が言ってしまうと、あっ、みたいなことは、よくありました。

(前野) 禁断の呪文みたいなやつを (笑)。

(加藤) ええ。何か縁起が悪いことを言っただけでいけなくて。そういう日本ではない慣習に自分の口と思考回路を慣らしていくのに、時間がかかりましたかね。

(司会) 坂本さんはいかがですか？

(坂本) どうですかね。川の話がありましたけど、ブータンでもブロッパって呼ばれる遊牧民がいて、ヤクとかを飼いながら移動してるんですけど、夏の場所は3000メートル超えるようなところにいる、ここは寒いので、冬になると下に降りてくるんです。その冬用の小屋は、やっぱり川沿いに点々とあ

るんですね。そこは電気もないんですけど、人間が生きるために水の確保っていうのは、やっぱり本当に大事なんだなって、いうのを思いますよね。

(司会) 向こうで坂本さんは、みんなの病気を、治すじゃないですか。みんなにはどういう感じで見られているんですか？

(坂本) 1回こういうことがありました。週に3回以上気を失うおばあさんがいたんですよ。それでみんなから、黒魔術にかけられて呪われていると言われて。でも、症状聞いたら、てんかんだったんですよ。一応、診療所にてんかんの薬もあったんで、薬を出したら、症状が治まっちゃったんですよ。そしたら、だいぶ遠い別の村に行ったときにその噂が広がっていて、おまえのことは聞いたことがあると言われて。ある日、でかいやつが突然現れて、呪いを解いていったみたいなの。

(一同) (笑)

(坂本) そうなのがあって、それはその薬が発作を抑えただけなんだけど、ここはすごい世界だなんていうのがありましたね。

フィールドワークで大切にしていること

(前野) 自分は、坂本さんが研究を通じてその国にもいろいろ貢献する姿を見て、ああ、そういうのすごい重要だなと感化されました。モーリタニアと日本とは特に漁業で強い関係があるのですが、バッタ研究を通じて、モーリタニアの教育方面であったり、研究であったり、経済とかそういう方向にもいろいろ貢献できたらいいなっていうふうに見えるようになりました。

(王) 坂本さん、いつ気づいたんですか？ 現地に行っておいしいデータだけ持って帰って自分の業績にする人多いですよね。

(坂本) それは伝統かもしれないです。京大は中尾佐助¹さんからのつながりというのがあって。ブータンにある未踏峰の山を登頂したいとか未知の植物を見つけたっていうところから始まったんだけど、川喜田二郎²さんが、ネパールの畑を見て、ここの川の水を上まで持って行ってあげるような仕事をしたら、村人はすごい喜ぶだろなっていうふうにつぶやいたらしいんですよ。それを聞いたお二人の弟子である西岡京治さんが、俺は今まで頂上にばかり目が行ってたけど、これからはふもとに下りて、その人たちのために何かがしたいって言ってブータンに来たんですよ。ブータンで農業を指導して、それでブータン農業の父といわれて、28年滞在して亡くなられたときには国葬になったんですよ。それだけブータンの方々のために尽くしたんです。僕をブータンに紹介してくださった栗田靖之先生は西岡京治さんの御友人だったんです。そういう縁があって自分がブータンに入れたので、ブータンとの信頼関係を傷つけないとか。

(司会) 他の方にもお聞きしたいんですけど、今、坂本さんが伝統をけがさないようにとか、日本が積み上げてきたものというのが大事というようなことをおっしゃるんですけど、例えばフィールドワーク研究を行うにあたって、大切にしている考えとか、そういうのって、皆さん持っていたりしますか。

(前野) 例えば、モーリタニアの人にとっ

て、私が初めて見る日本人というケースもあるので、もし私がおの人たちに対して嫌なこととかすると、日本人最悪と思われるので、現地にいるときは日本代表として恥ずかしくない態度で現地の人と接し、困ってる人がいれば手を差し伸べようと心がけるようになりました。

(王) 私、修士の時に民族植物学的な調査で植物採集をやったときに、自然から学べていうか、フィールドから学びなさいっていうのをすごく言われました。植物学者は、自然に対する畏怖とか尊敬があって、それはフィールドワークになったらなおさらで、植物は語らないけど、植物から聞くっていう態度が一緒にいてすごく伝わってきました。それまでは移民に対する自分の先入観がすごくあったんです。けれども、相手のバックグラウンドとかあんまり最初から偏見持たずに向こうから学ぶことを通して、移民とか難民も苦しんでいる中で、そこから結構学ぶことはあるなって思いました。ただ、そういうフィールドから学べることを、日本に帰ってきて異文化を経験していない人にどうやってメッセージとして伝えるかっていうのは工夫しないといけないんです。その工夫のしどころが、多分人文系の人的大事な点というか、ただ事実だけを外から日本に持ってきても、メッセージはあんまりないんですよ。学んだことをこちら側に伝えるようにアレンジする工夫がないと、単なる珍しい話聞いたみたいになっちゃうから、その工夫をどうするかとかは、ちょっと考えないといけないなと思っています。

(加藤) 私は、できるだけこちらが持っている価値観を捨てて、現地の人と同じ視点に立って、相手のことを対等に理解したいと思っています。例えばここは汚いとか、これは遅れているとか、そういったことを現地の政府の役人や周りの人たちが言うことがあるんです。そうではなくて、彼らの生活への敬意や、彼らの価値観への尊敬とかは常に持っていて、その行動の裏側にある考え方をできるだけ同じ視点で理解したいと思っています。なので、できるだけ同じ生活をして、同じものを食べて、同じ視点に立てるように努力しています。あとはそうですね、現地の人のためになるという考え方はものすごく大



ブータンでのフィールドワーク (坂本氏)

切だと思えます。例えばマレーシアではICカードという、戸籍のような身分証があるんですけども、奥地では情報が入らなかつたりしてマレーシア国民として登録されていない人たちがたくさんいるんですね。で、そういう人たちが身分証を作りたいと言ってきたら、それを調べて、こういうふうな手続きでできるよと一緒に手伝ったりしています。現地の人が求めている情報は、出来るだけ伝えるようにしています。私も彼らのことを色々教えてもらってるので、彼らが必要としていることがあったらできるだけ応じたいと思っています。

今後の目標

(司会) 最後に皆さんに将来の目標をお聞きしたいと思います。

(坂本) 僕はブータンに貢献したいとは思っているんですけど、自分が本当に貢献したいと思って仕事をして、それが逆に害になることが結構あると思うんですよ。ブータンでワクチンが普及して、それは大事なんですけど、現地でインフラが整っていないので、それを村人に配ろうとした保健師さんが、村にたどりつく途中の崖から転落して死んじゃったこともあるんですよ。こっちが勝手によかれと思って、これをやるべきだと言っても、それが現実に即していなかったら現場で働く人間を危険に曝してしまったり、現地に害を及ぼすことになるので、そこら辺は注意しないといけないと思います。目標というか、ひとりよがりの判断で害を与えないようにと思います。

(王) 私は、タイなどで調査をやってきましたんですけど、今、日本に外国人とか移民とか多いんですよ。最近、留学生も含めていっぱい日本人以外の方が、本当にこの20年ぐらいで倍増というペースです。それで、前は外国の研究で、日本のことを考えようと思ってたんですが、最近は日本のことも、異文化っていう感覚です。都市部なんかは、外国とか異文化とかいろんな問題が文化や宗教絡みで起こっているんで、日本と外国を比較するというよりも、日本の事例も異文化が混交している事例として、日



モーリタニアでの野外調査 (前野氏)

本の社会を多民族とか多宗教という視点から見られるようになりたいなっていう気が最近しています。

(加藤) 私は、これまでずっとマレーシアの狩猟採集民を見てきたんですけども、似たような歴史を持つ人たちが、同じボルネオ島のインドネシアという別の国にも住んでいます。そこでも環境破壊とか似たような状況が見られるのかを比較研究をしていきたいと思っています。あと、現地への貢献という点では、政策などへの働きかけができればいいなというふうに考えています。例えば、いま奥地の住民の生活援助として、いろいろなプロジェクトがあるんですけど、うまくいってないものも結構あります。例えば私が見ているのだと、養鶏プロジェクトとか養豚プロジェクトとかで、ニワトリとかブタとかを飼わせるんですけど、もともと狩猟採集をしていた人たちは、飼われたものを食べ物としてみなさない傾向があるんです。なのでそういったものを飼わせても、一切食べることがなくて、餌をやるだけでそのうちニワトリが病気になるって死んじゃったというのがけっこうあります。政府も割とお金を出してやろうとしているんですが、慣習に合わないプロジェクトとか、あまりうまくいってない部分があるので、そういったプロジェクトとかに何か提言をできるようになればよいなと思っています。

(司会) 前野さんは、いかがですか？

(前野) 自分は、バツタの生態をいっぱい明らかにして、今まで人類が解決で

きなかつたバツタの大発生を阻止する手がかりを得て、バツタ問題に終止符を打ちたいです。もう一つ、小さい頃からファーブルにあこがれてきたので、いずれ自分がいろんな虫を研究して、ファーブル昆虫記の続きを書いて、次世代にバトンをパスしていけたらいいなと夢見てます。

(王) 今のバツタに特化させず、いろんな虫を観察して。

(前野) バツタだけでなく、いろんな虫も研究したいです。

(司会) いずれ、前野昆虫記を出せたら。

(前野) ウルド昆虫記を出すのが夢です。

(坂本) 現実に出せるんじゃないですかね。

(前野) 何とかいけたらいいなと思います。今はバツタの研究をしていますけど、他の虫を研究していると、違ったアイデアとか考えるので、研究能力が向上してそれがいずれバツタ研究に還元されるので、いろんなかたちで研究していけたらいいなと。今は砂漠の昆虫にすごい興味を持っていて、砂漠という過酷な環境で生きている虫たちが、どういった技を秘めているのかを解き明かすことができれば、暑さ対策のヒントがわかったりとか、虫から学ぶことがたくさんあると思うので、いろいろチャレンジしていけたらいいなと思っています。

(司会) 今日は海外のフィールドワークでの珍しい経験だけでなく、現地調査に対する皆さんの熱い思いを語っていただきました。お忙しいところありがとうございました。

¹ 中尾佐助 (1916-1993) 京都大学出身の植物学者。

² 川喜多二郎 (1920-2009) 京都大学出身の地理学、文化人類学者。

研究の
現場から

An Inquiry into the Nature of Mind

Buddhist Philosophy and Interdisciplinary Dialogue

Marc-Henri Deroche

MIND DOES MATTER. Following Socrates' famous injunction "Know Thyself," the quest for self-knowledge is at the heart of the humanities. This core principle of ancient Western philosophy has interesting parallels in Buddhism which describes wisdom as "to know one's own mind as it truly is" (如實知自心, in Chinese translations of Sanskrit words *Laṅkāvatāra-sūtra* or *Mahāvairocana-sūtra*). In Buddhism, the mind (Sanskrit: *citta*, 心) is seen as the creator of our own world and destiny. Led by ignorance, the mind is afflicted by passions and suffering. Therefore, the mastery of one's own mind is seen as the decisive key to freedom and true knowledge. Following this emphasis on the central importance of the mind and its philosophical training, the Idealist School (*Vijñānavāda*, 唯識派) has even come to perceive the entire external world, including matter, as a projection of the mind. More simply, we may just acknowledge that our judgments strongly influence and shape our perception. Can we see things as they really are, if we ignore ourselves?

MAPPING THE MIND. Science and philosophy/religion seem to approach mind (including the whole range of sensations, feelings, emotions, thoughts, reason and intuition) from very different angles. For example, neuroscience apprehends mind as a measurable object according to the examination of another subject's brain. On the other hand, phenomenology and Buddhism are interested in one's own subjective experience itself, explored through introspection, reflection, self-analysis or meditation. But could these approaches be seen as complementary, rather than opposite, in order to draw a more complete map of the mind? Inspired by the interdisciplinary spirit of the Hakubi Center, I have collaborated with Kyoto University's Kokoro Research Center and the Mind & Life Institute (USA) to organize an interdisciplinary dialogue entitled "Mapping the Mind," held in Kyoto in April 2014, and featuring H. H. the 14th Dalai Lama, and distinguished scientists and scholars (the entire event can be seen from <https://www.youtube.com/watch?v=kn93IKmaKgc>).

MINDFULNESS. One salient outcome of such dialogues has been the scientific study of Buddhist meditative techniques. The Buddhist discipline of mind is intimately connected with the notion of *satī* in Pali or *smṛti* in Sanskrit: "mindfulness" (念), the capacity to deliberately focus the attention on a chosen object. With programs like "Mindfulness-Based Stress Reduction," developed at the University of Massachusetts, mindfulness techniques are now increasingly being introduced in healthcare, education or management. The success of this trend of research and applications has also raised some questions. From the point of view of Buddhist studies, we may ask: is it possible to extract such techniques from the whole of Buddhism without denaturing them? Even if we do not consider more religious issues such as post-mortem destiny, Buddhist meditative techniques are traditionally understood within the threefold frame constituted by ethics (*śīla*, 戒), meditation (*samādhi*, 三昧) and wisdom (*prajñā*, 般若). They are based upon ethics and guided by philosophical insight. In order to examine further this East-West transfer, the analysis of the "technologies of the self" (Michel Foucault) or "spiritual exercises" (Pierre Hadot) in ancient Western philosophy, for example, may historically and culturally offer a wider perspective and show us a common ground: the central value of the conversion of the attention and its cultivation in the "quest for wisdom" (Greek: *philo-sophia*), conceived as a way of life. Undeniably, an important contribution of contemporary mindfulness studies has been to reconsider some of the relations between philosophy, psychology and medicine. Wasn't the Buddha himself called the "Great Doctor"?

NEVER MIND. Buddhist sources analyze precisely how thoughts manifest in the mind, remain for a while, and then disappear. Mind itself cannot be defined as anything. The nature of mind is said to be "emptiness" (*śūnyatā*, 空性), a decisive notion especially refined in the School of the Middle Way (*Madhyamaka*, 中觀派). At this ultimate level of analysis, we reach a paradox: even the Buddha cannot see the mind. Eloquently, in *Zen* 禪, the final state of mind training is called "no-mind" (無心, *mushin*). In this tradition, complete self-mastery is defined by the ability to remain in a state of open presence or choiceless awareness, all-including and spontaneous, beyond hopes and worries. In my Hakubi research project, I am investigating a similar yet unique doctrine of "pure awareness" (Tibetan: *rig pa*) with its other major cognitive characteristics such as clarity, lucidity, wakefulness, vividness, and expressivity, in the tradition of the "Great Perfection" (*rdzogs chen*), a remarkable synthesis preserved in the Himalayas (North India, Nepal, Bhutan and Tibet). While investigating pure awareness mainly through in-depth research on primary sources and in fieldwork, I have had exceptional opportunities to discuss its philosophical significance with scholars from the wide range of disciplines represented at our Hakubi Center and Kyoto University.

(マルク・ヘンリ デロッシュ)



Speakers and organizers of the international colloquium "Mapping the Mind"

社会科学と研究方法

額定其労

私は現在、オックスフォード大学の法学部の一機関である Centre for Socio-Legal Studies にて在外研究を行っている（滞在期間は 2013 年 12 月から 2014 年 11 月まで）。ここを訪問先として選択したのは、同センターに Fernanda Pirie 博士がいるからである。Fernanda 博士は、チベット法文化を専門とするオックスフォード大学出身の人類学者である。彼女の主なフィールドワーク先は、中国・青海省のチベット遊牧社会とインドのラダック地域のチベット村落社会である。私は彼女と次のような接点を持つ。即ち、①研究対象が同じくチベット仏教圏の遊牧社会（チベットとモンゴル）であること、②私も人類学を学んだことがあること（北海道大学／2005 年 4 月から 2007 年 3 月まで）、及び、③その期間、私は青海省のモンゴル遊牧民を対象に法人類学的なフィールド調査を行ったこと、である。

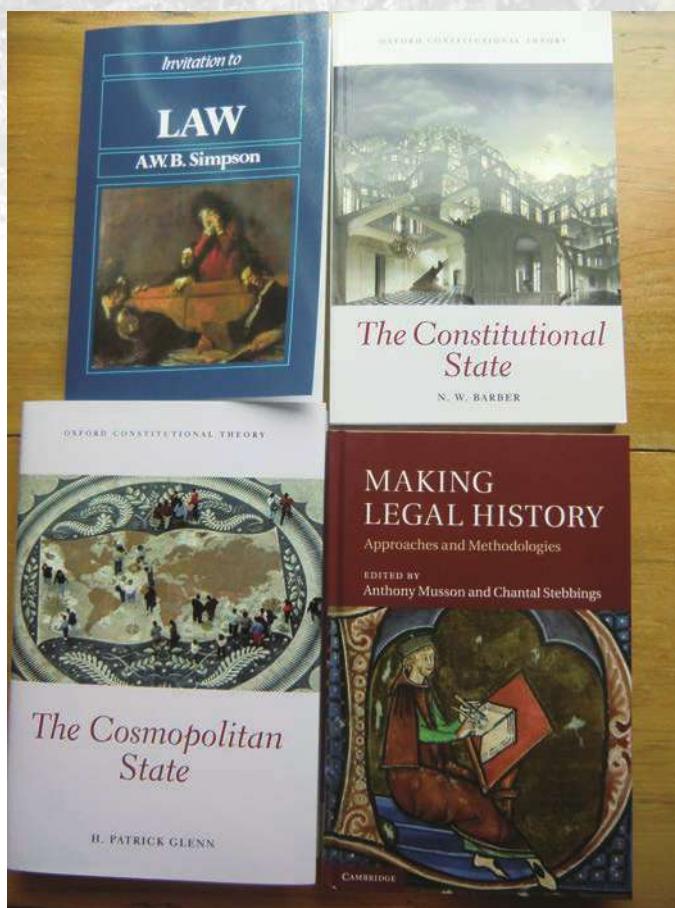
一方、同センターのホームページからも判る通り、ここには法学や社会学、人類学の諸専門家が所属しており、メンバー全体としては多岐に亘る研究テーマを持つものの、「社会における法」(law-in-society) の研究を目指す点ではみな共通している。また、同センターでは学期中に様々な定期セミナーが開催されており、法学部の諸定期セミナーと併せれば実に多くのセミナーが一週間にあり、その多さは、セミナー全てに出席すると自分の研究が出来なくなるほどである。こうした活発な諸イベントの中で私の興味を最も引いているのは、同センターにおける大学院生を対象とした研究方法論に関する演習と、センターのメンバーたちによる研究方法論を巡る不定期の討論会である。これらの授業と討論会は、自らの研究方法をもう一度考え直そうとしている私に有益な示唆を与えてくれている。

私が研究している法制史の分野は、元々は法学部における法の歴史を教える授業として登場したものであろうが、現在は法学者や歴史学者が中心となって行っている一つの学問領域になっている。しかし、今日の日本における法制史分野はその研究方法論から見て決して独立の学問分野として成立しているとは言えない。なぜならば、今日の法制史分野は法学や社会学、歴史学の手法、或いはその併用を基礎に成り立っていると見なされるからである。特に私が行っているアジアの伝統法の研究にとっては、学際的な研究手法が最も有用であると考えられている。もちろん諸分野の方法論に過度に拘る必要は必ずしもないだろうが、学際的な研究を

行っている者は少なくとも自らがどのような研究の視点を探っているのか常に自覚しているべきと思う。

研究方法を予め明確にしておくこと自体は、当該研究における理論構築作業にも関連する。どのような研究方法（或いは研究視点）を採るかによってその研究が目指す到達点も異なってくるからである。日本では研究方法論に関する教育研究があまり重要視されていないようである。そのためか、日本の社会科学の諸分野では実証研究に偏る傾向が見られる。白眉プロジェクトは、我々に自己責任に基づいた自由な研究が出来る環境を提供してくれている。単なる記述的な研究では世界中の学者と対等な対話が出来なくなってきている社会科学（少なくとも私の研究分野）の実態を痛感する中、今後は白眉プロジェクトにおいて更なる高いレベルの研究が出来ればと願っている。

(エルデンチロ)



最近読んでいる本

動物の行動を知ること

原村 隆司

なんのために生物は生きているのか？この疑問は、生物学を対象とする研究者だけでなく、多くの方々が一度は考える問題であると思います。もちろん、私も高校生の頃、この疑問について考えました。様々な視点からこの疑問に関する答えはありますが、生物学の視点からこの疑問を解決したいと思い理学部に進学したのが、私の研究者としてのきっかけになったのかもしれませんが。私が専門とする動物行動学や行動生態学の視点では、簡単に言うと、「自分の子供をより多く残すために生物は生きている」という結論に達します。イギリスの動物行動学者リチャード・ドーキンスが書いた本「The Selfish Gene: 利己的な遺伝子」を読んだ方もいらっしゃると思いますが、「ライバルを蹴散らしてでも自己の適応度（生存や繁殖率）を高めること」、それが、生物が持っている特徴であるといえます。

「生物が持つこのような適応度を高める行動を外来種駆除に利用できないか」というのが、私の現在の研究テーマです。外来種は、本来の生息地から他の場所に持ち込まれた生物のことをさしますが、残念なことに、これらの外来種は本来そこに住む在来種に悪影響を与えたり、最悪の場合、在来種を絶滅に追い込みます。そのため、少しかわいそうではありますが、外来種は駆除していく必要があります。今、私が対象としている外来種は「オオヒキガエル」というカエルです。このカエルはサトウキビ畑の害虫駆除のために、世界中の様々な地域に持ち込まれました。もちろん、このカエルも、自身の適応度を高めるために様々な行動や生態を進化させています。例えば、カエルは交尾のために雄がゲコゲコ（オオ

ヒキガエルは、ポボポボボ…）と鳴きます。田んぼでも、梅雨時期になると色々なカエルの鳴き声を聞くことができますね。このカエルの鳴き声にも、なぜか多くの雌を引きつける鳴き声があったり、まったくモテない雄の鳴き声があったりします。多くの雌を引きつけることのできる雄は、より多く自分の子供を残すことができます。また、あるフェロモンは、同種ライバルの成長を抑制します。成長を抑制されたライバル個体は、体が小さいので、他個体に共食いされてしまいます。いずれの場合も、繁殖や生存率といった自己の適応度を高めるために進化してきた特徴です。このように進化してきた行動や生態をうまく利用することで、より簡単にオオヒキガエルを一カ所に集めて捕獲したり、個体数を減らしたりできるのでは？と考えています。

思いついたアイデアの駆除法が効果あるのかどうかを調べるためには、生きた個体を用いての生物試験が必要不可欠です。オオヒキガエルは特定外来生物として指定されているので、持ち運びをすることができません。そのため、私の研究現場は、オオヒキガエルが移入された沖縄県の石垣島です。野外でオオヒキガエルの成体やオタマジャクシを採集し、目星をつけたフェロモンが個体の行動をどのように変化させるのかをビデオカメラで記録したり、多くのオオヒキガエル個体を集められる鳴き声をプレイバック実験などで明らかにしたりしています。カエルは夜行性のため、オオヒキガエルを捕まえたり、野外実験を行ったりする場合は夜が調査時間となります。カエルがいるところには蛇もいるので（石垣島にはサキシマハブという毒蛇がいます）、蛇に咬まれても大丈夫のように膝までの長靴を履いた状態で実験を行っています。満点の星空の中、長靴をはいて一人ぼっちでカエルを捕まえたり実験を行ったりしている自分を想像するとなにやら滑稽のような、しかし、とても贅沢な時間をもらっているような、そんな気分になります。

このような外来種自身の行動を利用した駆除法というのは、まだ発展途上の状態です。その理由の一つが、やはり外来種は生物学の対象動物としては人気がないため（基本的に悪者扱いされているので）、基礎的な行動や生態さえも解明されていないからです。オオヒキガエルを理解すればするほど、オオヒキガエルの駆除研究が発展する、何やら矛盾しているような気もしますが、オオヒキガエルとにらめっこしながら石垣島で実験する研究スタイルはこれからも続きそうです。

(はらむら たかし)



オオヒキガエルと私

2013年6月から University of Oxford, UK に研究場所を移した。研究施設は日本の方が勝る点もあると思うが、研究所のすぐ側にフットサル、スカッシュ、テニス等々のスポーツが出来る場所や Ale Beer が飲める University Club があり OFF の充実に関してはイギリスが断然上であろう。この一年間の滞在でイギリスと日本では研究生生活に大きな違いがあることを痛感した。その差異について考えたいと思う。

まず最も大きな違いは研究所の所属職員の国籍の多様性である。もともとお国柄でもあると思うのだがとにかく外国人が多い。色々な国籍の人をサポートする体制も非常に整っており留学生が感じる不便さがほとんどない。そのため世界各国の精鋭たちが集束し、討論が多彩になり良い発想が生まれる。もちろん民族が多様なためお互いの常識や意見が違うことが多く Project の初動はどうしても遅れる。よって直近の目標を達成するためのチームとしては不適である。しかし科学の命題の解明という大きな目標に向かって進む場合、民族の多様性は非常に重要になるのではないだろうか。多様な民族からなるチームが偉業を成し遂げるよい例として今回の Brazil World Cup 優勝国のドイツ代表メンバーが挙げられる。ドイツ代表は様々な移民背景を持ったメンバーによって構成され、民族の違いによる個々人の能力の多様性が見事に融合し優勝という偉業を成し遂げた。もちろん民族内においても多様性があるのは認めるが、異種民族間のそれと比べるとその差異は微々たるものであろう。日本は社会全体どこをとってもかなりの純血主義だ。科学界の更なる発展だけでなく、国力の向上のためにも社会全体の多民族化が必要とされるかもしれない。もちろん、多民族化による民族間対立や犯罪率上昇などの弊害が予想され、政治的・教育的対策にかかる労力も相当なものであろうが、それを補うメリットがあると考えている。

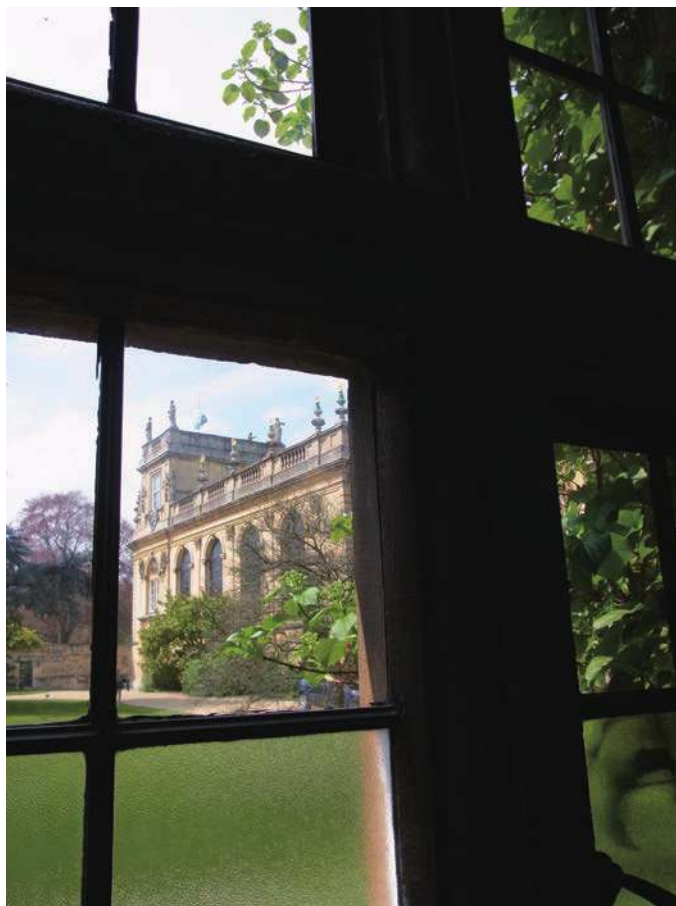
また、欧米の人たちは共同研究の遂行が上手い。日本人はなかなかこれができない。これは日本人が一人の人間に万能性を求める傾向があるからではないかと常々思っている。イギリスでは科学だけでなく様々な現場で分業制が確立しており、お互いの仕事を Respect している。分業することによって個々人にかかる仕事量は軽減され、さらに自分の仕事における責任部位も明確となるためより効率が上がる。日本においてもこの制度を取り入れれば男女ともに家庭と仕事の両立が容易となるであろう。特に日本の研究業界では Post Doctor までは女性が多

いのだが Principal Investigator レベルになると一気に減少する。優秀な女性研究員が離職するたびに分業制の確立の必要性を痛感する。

こうやって考えてみると、日本人というのは相手との違いを認め協調して物事を遂行するのが苦手なようである。戦後の団塊の世代のように、「欧米に追いつけ追い越せ」で人々が一致団結しひたすら前進する時代、つまり皆が同じ目的・方向に向かって進んでいく時代は終焉した。現在は社会の成熟にともない、より個人の能力・意見が団体の利益・発展につながりやすい時代となり、団体の多様性の重要性が増して来ているのではなかろうか。

もちろん日本滞在時の方が良かったと思う点も多々ある。例えば実験機器の精密さ、試薬の質の良さ、全てのことにおける時間の正確さ等々である。イギリスの鉄道の発着遅延にはほとんど閉口している。日本人の勤勉さや規律正しさは実に誇るべき所であるから、それを維持しつつ民族の多様化や仕事の分業制を取り入れていくべきだ。そんなことをここイギリスにて日々感じている。

(おおぐし すがこ)



1554年に創設された Trinity College

白眉研究ピックアップ

量子ブラックホールのホログラム的記述の数値的検証

花田 政範

身の回りにある物体をよく調べると、分子、原子とどんどん細かい構成要素が現れて来ます。それ以上分割できない最も基本的な構成要素を素粒子と呼びます。原子は原子核と電子から出来ています。電子は素粒子だと考えられていますが、原子核は陽子、中性子が中間子を介して相互作用しているものであり、更に細かく見るとクォークとグルーオンという素粒子が複雑に相互作用をしていることが分かります。素粒子の間の相互作用としては重力、電磁気力、強い相互作用、弱い相互作用の四種類が知られています。先ほど出て来たグルーオンは強い力を媒介する粒子であり、電磁気力を媒介する粒子は光の粒、光子です。重力以外の三種類の相互作用は素粒子標準模型で正確に記述できています。素粒子標準模型は、ミクロの世界を記述する上で必須の法則である量子力学に基づいて、ゲージ理論という数学的な道具を用いて組み立てられています。

ミクロの世界を記述する量子力学と並んで重要な物理法則として、一般相対性理論（アインシュタインの重力理論）があります。一般相対性理論は、宇宙のマクロスケールの物理を理解する上で重要な道具です。

量子力学と一般相対性理論は、共に20世紀初頭に発見され、それ以来大きな成功を収めて来ました。しかし、この二つの理論を融合して重力の量子力学的な性質を記述しようとすると様々な理論的困難が生じます。重力の量子論的な性質は例えばブラックホールの内部構造や生

まれたばかりの宇宙を理解するために重要だと考えられており、多くの研究者がこの困難の解決に挑んで来ました。量子重力理論の特に有望な候補が超弦理論です。超弦理論の研究を通じて、1990年代後半に量子重力の驚くべき定式化が提案されました。一見すると重力を含まないある種のゲージ理論が量子重力を記述するというのです。多くの研究者の努力の結果、ゲージ理論のある種の極限が重力の古典的な効果を正しく記述していることは疑う余地が無くなっていました。今回の我々の研究では、ブラックホールを記述すると考えられているゲージ理論を数値的に解析し、量子重力の効果が記述できていることを強く示唆する結果を得ました。このような研究を更に推し進めることで、我々の宇宙の成り立ちに対する新しい知見が得られると期待しています。

(Holographic Description of a Quantum Black Hole on a Computer, Science 5月23日号)

(はなだ まさのり)

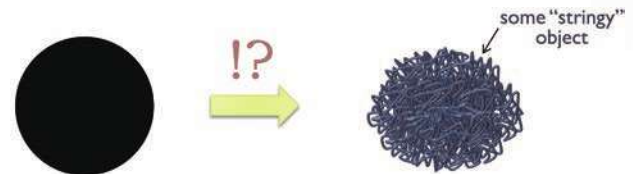


図. 超弦理論でのブラックホールの記述。ブラックホールは弦から出来ている？

活動紹介

2014 白眉合宿

(2014年5月30-31日)

関西セミナーハウスにて行われた研究合宿では、42名の白眉研究者が参加し、研究セッション、赤山禅院・曼珠院訪問、BBQなどで親睦を深めました。

研究セッションでは、研究者がランダムに2人組になって、相手の研究内容を全員に向けて発表しました。自分と違う分野の研究内容を発表することで、読んだり聞いたりするだけよりも、その研究により親しむことができたと思います。また、初心者が発表することで難しくならず、全3セッションを通して集中して参加することができました。話題のiPS細胞の最先端や左巻きかたつむりのお話、タイの移民のお話など、幅広い分

野の研究内容に贅沢に触れました。

セッションの間のエクスカージョンでは赤山禅院や曼珠院を訪問しました。皆で歩きながら歴史に触れ、最先端の研究の話も織り交ぜ、時の流れを感じられた静謐なひとときでした。

最後のBBQでは、すでに打ち解けた雰囲気の中で、各々研究の話も延々としていました。

京都の自然の中で様々な分野の研究に触れ、またその研究過程での人間味あるお話を伺い、自分を顧みて、「よし、今日からまた頑張ろう」と思いました。

(鈴木 咲衣・すずき さきえ)



白眉センター 2013 年度年次報告会

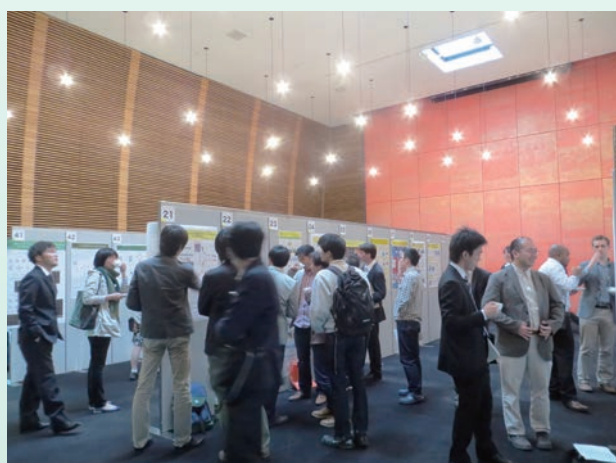
「深化する知 - Treasuring Wisdom, Refining Technology」

(2014 年 4 月 22 日)

2014 年 4 月 22 日 京都大学芝蘭会館山内ホールにおいて白眉センター 2013 年度年次報告会「深化する知 - Treasuring Wisdom, Refining Technology」が開催されました。

報告会ではまず初めに白眉センターの 2013 年度における活動および白眉研究者の研究成果が紹介されました。次に、4 名の白眉研究者（中西 竜也、ピエール・イブ ドンゼ、今吉 格、藤井 啓祐）により、それぞ

れの研究成果の発表が行われました。続くポスターセッションでは 1 期から 4 期までのすべての白眉研究者がポスター発表を行い、参加者と様々な討論を行いました。その後行われた総合討論では J T 生命誌研究館顧問西川伸一氏および京都大学大学院文学研究科准教授 白眉センタープログラムマネージャー 伊勢田哲治氏をゲストに迎え、科学論・科学哲学に関する講演及びディスカッションが行なわれました。





京都大学白眉センター2013年度年次報告会
The Hakubi Center for Advanced Research - 2013 Annual Report Meeting





深化する知

Treasuring Wisdom, Refining Technology

2014年4月22日（火）14:00~
芝蘭会館山内ホール

プログラム：
14:00- 年次活動報告
14:30- 白眉研究者による研究発表
15:30- ポスターセッション
16:30- 総合討論

ゲスト：西川伸一（JT生命誌研究館顧問）
伊勢田哲治（京都大学大学院文学研究科）

問い合わせ先：京都大学白眉センター
<http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/index.html>

参加
無料

今こそ、新しい知の体系を創造すべきではないでしょうか。知と技術を正しく衆々の手の中に納めるために。白眉センターは、人文科学、社会科学、自然科学、応用科学と様々な分野間の学際的会話を進め、あらゆる知の統合を目指しています。この報告会は、そんな「知」を深めるための、またとない議論の場です。

SCOPE

Today, we are confronted with numerous global challenges. Technological innovations, while necessary, cannot be sufficient: without enough discernment, they generate new threatening issues. We have thus reached a juncture in our development where we must treasure the wealth of wisdom accumulated by all human civilizations and create a new body of knowledge for survivability and harmonious coexistence. The Hakubi Center aims at deepening such a vital knowledge through the advancement and interdisciplinary collaboration of humanities, social sciences, natural sciences and applied sciences. With the presence of distinguished guests, this meeting will be an exceptional opportunity to present significant research achievements in a variety of fields, as well as to open a cross-disciplinary discussion about the knowledge and ability that we need in order to take care of our world.

白眉研究者による研究発表

- 中西 竜也/NAKANISHI Tatsuya (中国イスラーム思想)
普遍と特殊のあいだー中国ムスリムによる文化間対話と知的創造の歴史的一瞥
Intellectual Creation by Chinese Muslims
- ピエール・イブ ドンゼ/Pierre-Yves Donzé (経済史・経営史)
20世紀における技術と医療システムのグローバル化ー経済史の観点ー
Technology and the Globalization of Medicine in the 20th Century:
The Perspective of Economic History
- 今吉 格/IMAYOSHI Itaru (神経発生学)
脳の設計図と変化する脳
Brain Development and Plasticity
- 藤井 啓祐/FUJII Keisuke (量子情報科学)
複雑性の極限への挑戦ー量子コンピューターが切り開く新しい世界
A Challenge for Complexity Frontier: A New World Opened Up with Quantum Computer

白眉研究者全員によるポスターセッションも行います。

Guests

西川伸一
(JT生命誌研究館)



JT生命誌研究館顧問
MVI社人オール・アムスト・サイエンス・ジャパン代表理事。
1973年京都大学医学部卒業。
同大学結核菌部免疫研究所勤務後、ケルン大学薬理学研究所に留学。同大学准教授を兼任。京都大学大学院医学研究科分子遺伝学教授を兼任。京都大学退職後、2002年より理化学研究所専任、産生科学総合研究センター副センター長および創成研究グループディレクターを兼任。2003年より、現職。
著書に「生物のなかの時間」「幹細胞Wars」など

伊勢田哲治
(京都大学大学院文学研究科)



京都大学大学院文学研究科准教授
1968年生まれ
専門は科学哲学・倫理学
京都大学文学部卒業
イリノイ州立大学Ph.D. (philosophy)
名古屋大学情報文学部講師。同情報科学研究科准教授などを経て現職。
著書に「疑似科学・科学の哲学」「動物からの倫理学入門」、編著に「科学技術をよく考えるーナタケイカル・シンキング編選集」など

ポスターの PDF ファイルは以下のページからダウンロードいただけます。
http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/00_new/140422.html



京都大学吉田南キャンパスは陽気な学生たちの活気にあふれています。私の新しい居室は、人通りの多い通路の真上にあって、4月には初々しかった1回生の会話が、だんだんと京大生らしい馬鹿話へと変遷していくのを楽しんでいます。

人間・環境学研究科（総合人間学

部）の助教としての重要なしごとが、学生実習の担当です。全学向けの生物学実習を担当していますが、これは私自身が学生だった頃に最も影響を受けた講義であるだけに、とても思い入れがあります。

同実習には、毎年、京大生としてもかなり濃い学生たちが集結してきます。小学生の頃からキノコ図鑑を熟読していて、「その菌の胞子は原色図鑑上巻の〇ページに載っています」と私の知識の不備を指摘してくれる学生もいれば、クラゲが好きすぎて、船舶免許をとって自分で採集に行ってしまう人もいます。こうした学生たちが持っている探究心と可能性が、素直に伸びていく環境をそれとなく整えておくこと。これが難しいけれどもやりがいがある教員としての役割だと考えています。

末端で学生たちと関わる教員の一人としてどうあるべきか、ときに深く悩むことがあります。「人材」という言葉によく出会うようになってきました。学生たちを何らかの目的のための「材」として扱うかのような昨今の風潮には、直に学生たちと接する教員として、根本的な部分で違和感を覚えます。

未来は若い世代が主体的な知性と底抜けの明るさで手にするもの。時代を超えて受け継がれるべき学問と教育の哲学を、この吉田南キャンパスでじっくりと探求していけたらと思います。

（とうじゅ ひろかず）

東樹 宏和

第1期特定助教・在職 2010年4月1日～2012年3月31日・2012年4月1日より京都大学 人間・環境学研究科 助教

ポスト白眉の日常

長尾 透

第2期特定准教授・在職 2011年4月1日～2013年10月31日・2013年11月1日より愛媛大学 宇宙進化研究センター 教授

気づけば、京都から愛媛に移り一年が経とうとしています。愛媛大学は地方大学としては珍しく、宇宙科学を推進するための組織として宇宙進化研究センターを設置しています。縁あってこのセンターに教授として着任してからは、天文学・宇宙物理学を軸とした教育と研究に邁進する日々を過ごしています。現在の私の研究グループは、研究員1名、大学院生が博士と修士のそれぞれの課程に1名と2名、あと数名の学部生というコンパクトな構成で、アットホームな雰囲気の中で（と思っているのは私だけという可能性もありますが…）銀河進化や巨大ブラックホールの形成進化を観測的に解明するための研究に取り組んでいます。

むしろ想定していなかったのは、国立天文台や宇宙科学研究所といった研究機関の各種委員会の外部委員や、研究分野の将来計画検討に関わること、全国共同利用の研究に係る審査委員など、自分が属する研究業界を支える立場での仕事に関わる機会が一気に増えたことです。そうした仕事を進めるためには、自分が直接関わったことのない研究内容に対しても想像力を働かせ、その意義や背後にあるストーリーに思いを巡らすことが求められます。このような場面では、白眉センター在籍時にセミナーや合宿企画などで多様な分野の研究者と楽しんできた異分野交流の経験が大いに役立っています。

白眉センターからは離れた私ですが、これからの研究生活の中で「京都大学白眉研究者」という称号をいただいた立場だからこそできることは何だろう、ということを考えています。いつか白眉センター出身者が連携して、既存の学術の枠組を超えたチャレンジに取り組めたらいいな、と夢想しつつ、当面の教育研究業務に励む日々を過ごしています。

（ながお とおる）

白眉センターにいた頃比べると授業や会議などの仕事はずいぶん増えましたが、それは想定内の範囲の変化と言えます。



受賞・報道

- ・白眉プロジェクトの紹介記事が朝日新聞に掲載されました。(京大「改革」の行方2 白眉プロジェクト 2014年7月1日)
- ・細将貴特定助教が文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞しました(2014年4月15日)。また、研究内容が季刊雑誌「kotoba」(集英社クオーターリー) 2014年夏号「生命はなぜ非対称に進化したのか?」(特集 生命とは何だろう?)にて紹介されました。また、TBS ラジオ「夢☆夢 Engine!」(2014年5月10日)に出演しました。
- ・前野浩太郎特定助教の研究内容が日経ビジネス online の連載記事で紹介されました(2014年4月10日 バッタ博士とモーリタニアの砂漠でバッタにまみれる、2014年4月11日 サバクトビバッタとは何者なのか、2014年4月14日 バッタ博士、サバクトビバッタと出会う、2014年4月15日 バッタ博士、モーリタニアへ旅立つ、2014年4月16日 バッタとバッタ博士といた Sahara 砂漠の「幸せ」な時間について、2014年4月17日 バッタ博士の研究に「アフリカじゅうが期待をしている」)。また、ときめき昆虫学(メレ山メレ子著 株式会社イースト・プレス発行 2「バッタ者」はなぜカブくのか)において研究内容が紹介されました(2014年4月14日)。また、電通報(土屋泰洋×江渡浩一郎「生き方として研究者を選んだ人が野生の研究者だ」)において研究内容が紹介されました(2014年7月28日)。
さらに ABS 秋田放送「世界的なバッタ研究者」に出演しました(2014年4月9日)。また、ドイツのテレビ番組「Megaherz」への映像提供を行いました(2014年8月10日)。
- ・今吉格特定准教授が 第6回 ドイツイノベーションアワードを受賞しました(2014年6月18日)。



第6回 ドイツイノベーションアワード授賞式の様子
(写真提供: DWIH 東京)

- ・村上慧 現 名古屋大学物質科学国際研究センター助教が日本化学会第94春季会(2014)優秀講演賞(学術)を受賞しました(2014年4月30日)。
- ・齊藤博英特定准教授、西村周浩特定助教、江間有沙特定助教、中西竜也特定助教、前多裕介特定助教らのグループが京都大学「学際研究着想コンテスト」優秀賞を受賞しました(2014年8月29日)。



学際研究着想コンテスト 優秀賞グループ

左から中西竜也特定助教、齊藤博英特定准教授、前多裕介特定助教、江間有沙特定助教、堀智孝白眉センタープログラムマネージャー



受賞祝賀会の模様(左が西村周浩特定助教)

センター要覧を発行しました

白眉センター要覧第5号 The Hakubi Project at A Glance 2014 を2014年8月に発行しました。
以下のウェブページから PDF 版をダウンロードいただけます。
http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/O5_pub/index.html

第5期白眉研究者

KASHANI Sarah

人間・環境学研究科

Zainichi Korean Entrepreneurs and Ethnic Economies in Japan

Harvard University, Department of Anthropology · PhD candidate

GRUBER Stefan

人間・環境学研究科

Cultural diversity, heritage protection, and sustainable development in Asia

The University of Sydney, Faculty of Law · Lecturer

COATES Jennifer

文学研究科

Re-writing History: Women and War Memory in Japanese Film 1945-1970

School of Oriental and African Studies, University of London · PhD candidate

越川 滋行

理学研究科

多細胞生物の模様形成機構を構成的に理解する

Howard Hughes Medical Institute · Research Specialist

鈴木 咲衣

数理解析研究所

絡み目と3次元多様体の量子不変量の研究

九州大学数理学研究院 · 日本学術振興会特別研究員 (PD)

鈴木 多聞

法学研究科

第二次世界大戦の終結と戦後体制の形成

秀明大学学校教師学部 · 准教授

武内 康則

文学研究科

契丹学の構築：契丹の言語・歴史・文化の新しい研究パラダイム

大谷大学真宗総合研究所 · 日本学術振興会特別研究員 (PD)

DE ZOYSA Menaka

工学研究科

電子・光子の状態制御に基づく高効率熱輻射光源を用いた熱光発電

京都大学大学院工学研究科 · 特定研究員

時長 宏樹

防災研究所

地球温暖化と自然変動の相乗効果による急激な気候変化の解明

International Pacific Research Center, University of Hawaii · Assistant Researcher

中嶋 浩平

情報学研究科

Physical Reservoir Computing: Pursuing the Nature of Information Processing

Department of Mechanical and Process Engineering, ETH Zurich · JSPS Postdoctoral Fellow for Research Abroad

樋口 敏広

法学研究科

「地球環境問題」の誕生－放射性降下物問題とリスクをめぐる国際政治

University of Wisconsin at Madison · Associate Lecturer

名前

受入部局

研究課題

前職

VAN STEENPAAL Niels

文学研究科

近世・近代日本の伝記叢書にみる「人間」の創造

東京大学大学院法学政治学研究科 · 日本学術振興会外国人特別研究員

POUDYAL Hemant

医学研究科

Sodium/glucose co-transporter-1 (SGLT1) and glucagon like peptide-1 (GLP-1) mediated nutrient sensing in metabolic disorders

University of Southern Queensland · Post doctoral research fellow

前野 浩太郎

農学研究科

アフリカにおけるサバクトビバッタの相変異の解明と防除技術の開発

モーリタニア国立サバクトビバッタ研究所 · 日本-CGIAR 特別研究員

MAK Bill

人文科学研究所

Transmission of Indian astral science in East Asia and Southeast Asia

Kyoto University · Foreigner research associate 外国人共同研究者

村上 慧

理学研究科

硫黄元素の特性を生かした新規有機分子構築法の創生とその展開

名古屋大学大学院工学研究科 · 日本学術振興会特別研究員 (PD)

和田 郁子

人文科学研究所

近世インド海沿都市の発展に伴う広域社会の変容に関する史的研究

京都大学文学部 · 非常勤講師

山道 真人

生態学研究センター

生態と進化のフィードバック：理論と実証によるアプローチ

Department of Ecology and Evolutionary Biology, Cornell University · 日本学術振興会海外特別研究員 (PD)

『白眉センターだより』第8号

2014年9月30日発行

編集・発行 京都大学白眉センター

〒606-8501 京都市左京区吉田牛ノ宮町

TEL: 075-753-5315 FAX: 075-753-5310

Eメール: info@hakubi.kyoto-u.ac.jp

http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/

印刷

株式会社 サンワ

©2014 The Hakubi Project, Kyoto University

表紙写真：マーマツラブラムの「海岸寺院」(インド・タミルナードゥ州)
(撮影者・和田 郁子)